任意接種

風しんの予防接種をご希望の方に

1 風しんについて

風しんは風しんウイルスによっておこる感染症で「三日ばしか」とも呼ばれます。主に春先から初夏にかけて流行し、飛沫感染でヒトからヒトへと感染します。感染力は、麻しんや水痘（水ぼうそう）ほど強くありません。

2 風しんの症状は

主な症状は、発疹、発熱、リンパ節の腫れで、そのほかにせき、鼻汁、目が赤くなるなどの症状もみられます。潜伏期間は2～3週間で、発疹の出る2～3日前から発疹が出た後の5日くらいまでは感染力があるといわれています。感染しても子どもでは3日程度で治るとされていますが、大人になってからかかると関節痛がひどくなるなど重症化する傾向がみられます。約15%の人は感染力があるにもかかわらず特徴的な症状があらわれない不顕性感染であるといわれています。

3 風しんの合併症は

一般的に予後は良好といわれていますが、まれに血小板減少性紫斑病（症状としては出血斑、鼻血;約3000人に1人）や脳炎（症状としては発熱持続、けいれん、意識障害;約6000人に1人）といった重い合併症がみられる場合もあり、決して軽視できない疾患です。

妊娠初期の女性が風しんにかかると、先天性風しん症候群と呼ばれる病気により、心臓病、白内障、難聴などの障害を持った赤ちゃんが生まれる可能性があります。一緒に生活しているご家族からうつることが多いため、ご家族が風しんにかからないようにワクチンを受けておくことも大切です。

4 ワクチンの効果と副反応

ワクチンにより95%以上の人に免疫が獲得されます。ただし、1回の予防接種では免疫力が上がらない人や風しんに対する抗体価が次第に低くなっている人もいるため、現在では2回の定期接種が勧められています。風しんには特別な治療法はなく対症療法だけなので、ワクチンによる予防が重要です。

主な副反応は、発疹、じんましん、紅斑、かゆみ、発熱、リンパ節の腫れ、関節痛などが認められています。まれに重い副反応として、ショック、アナフィラキシー様症状、紫斑・鼻出血・口腔粘膜出血等の症状が見られる急性血小板減少性紫斑病（100万人接種あたり1人程度）が報告されています。

（裏面もご覧下さい）

5 次の方は接種できません

①明らかに発熱（通常37.5℃以上）している方
②重い急性疾患にかかっている方
③本剤の成分によりアナフィラキシー（重いアレルギー反応）を起こしたことのある方
④免疫機能に異常のある方・免疫抑制をおこす治療を受けている方
⑤妊娠している方および妊娠している可能性のある方
⑥その他、医師に予防接種を行うことが不適当であると判断された方

6 風しんワクチンを受けるには

他の生ワクチン（BCG・ポリオ・MR・麻しん・水痘・おたふくかぜなど）を接種した場合は27日以上あけてから、また不活化ワクチン（DPT3種混合・DT2種混合・日本脳炎・インフルエンザなど）を接種した場合は6日以上あけてから接種を行ってください。

今回あなたが接種する風しんワクチンは任意接種です。ワクチンの効果や副反応をお考えになったうえ、ワクチンの接種を受けるかどうかをお決めください。

ワクチンの接種を受けられるとお決めになった場合には、「風しんワクチン接種申込書・予診票」に正確に記入し、医師の問診、診察をお受けください。もし、ご不明な点がありましたら、医師にご相談ください。

7 予防接種後の注意事項

接種当日は接種部位を清潔に保ち、過度な運動を避け静かに過ごしてください。接種後2週間は健康状態や副反応に留意し、何か気になる症状がある場合は、医師に連絡してください。

本剤の接種により健康被害が発生した場合には「医薬品副作用被害救済制度」により治療費等が受けられる場合があります。詳しくは独立行政法人医薬品医療機器総合機構のホームページ等をご覧ください。

【女性への注意事項】接種前1ヵ月間、接種後2ヵ月間は、妊娠を避けることが必要です。

接種予定日	年　月　日（　）	医療機関名	

監修：北里大学　北里生命科学研究所　ウイルス感染制御学研究室　教授　中山哲夫